



年間第 18 主日 (ルカ 12:13-21)

溢れるほどの持ち物の中にはないのだから

「有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」(12・15) 今週のイエスのたとえに思いを巡らすために、この忠告にまず耳を傾けましょう。

それにしても暑いですね。暑さを気にしないようにと思って過ごそうと考えましたが、あるとき勉強部屋にいて気分が悪くなり、首を冷やしました。その時はおかげで少し持ち直しました。あれが熱中症の予兆だったのかも知れません。この暑さです。室内で熱中症にかかる危険も十分ありますから、私がテレビで野球観戦しているところで病院から呼び出しがかかったりしないように、十分健康には気をつけてください。

「フランシスコ」が、8月6日にも長崎県にやって来そうです。驚きました。まさかの「フランシスコ」直撃で、予定が大幅に変更になるかも知れません。いつも通り月曜日の5日には釣りに行こうかなあと思っていたのですが、「フランシスコ」が来るとなれば、釣りどころではなくなりそうです。話の内容について行けない人は、どうぞついて行けないまま、説教の続きを聞いてください。話が理解できず、どうしても気になる方は、教会役員か、NHKに問い合わせてください。

「有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」(12・15) 私たちは日本語訳からイエスの忠告を考えざるを得ません。原点のギリシア語聖書を理解できないからです。現状ではフランシスコ会訳か、新共同訳聖書からです。ひょっとしたら他の言葉の翻訳であれば、少し見え方が違うかも知れません。

たとえば、同じ箇所から英語で直訳したものを日本語に戻すと、「人の命は、その人の持ち物の満ち溢れの中にはないのだから」となります。この英語の直訳のほうが、私はピンとくるものがあるなと思いました。私たちは「あなたの命は私の手の中にある」という表現を理解できます。相手が自分の命を握っているという意味です。同じように、「人の命は、その人の持ち物の満ち溢れの中にはない」となれば、「人の命を握っているのは、溢れるほどの持ち物なのではない」という意味でしょう。

この表現で、イエスは何を言おうとしているのでしょうか。突き詰めるとそれは、「人の命を握っているのは神なのだ」ということでしょう。エアコン付きの部屋を持っていても、緊急の時に救急車を呼ぶ非常ボタンを取り付けていても、人の命を握っているのはエアコンでも非常ボタンでもなく、神なのです。私たちの命は神の手の中にあるからです。

私たちは神の手の中にある者として日々生きるべきです。つい先ほど、「母のためにミサをお願いします」と家族がミサを依頼に来ました。初金曜日に御聖体を授けに病人訪問に行ったときのお母さんの様子を伝えました。「病院で長期入院をしているにもかかわらず、私が訪ねていく時間は必ず眠らずに起きて待っています。私が祈りをしているあいだ目を合わせて祈りにじっと耳を傾けます。」

そういうことを話すと、家族の方から「少し前に病者の塗油を受けてから、危機を脱してすっかり良くなりました。神父様ありがとうございました。当時は、いよいよのことも覚悟しなければと思っただけに、回復ぶりには驚いています」と喜んでおりました。

私はこの方の生き方は、神の手の中にある者の生き方だと思っています。確かに病院で入院生活をしていますから、病院のお世話を受けて生きている人です。薬や、さまざまな医療に助けられているでしょう。ただそれらは、言わば溢れるほどの持ち物を意味しています。人の命は溢れるほどの持ち物の中にはないのです。医者でさえ、「全力を尽くしました。最後は本人の気力次第です」と言ったりします。「私の手の中にあります」などと決して言わないのです。

この病人は、初金曜日の聖体拝領を何より大切にしている人です。御聖体を待ち望むその姿勢は、「自分が神の手の中にある」ということを忘れない姿です。中には訳あって御聖体を拝領できない病人もいるでしょう。けれども司祭がやって来て、祝福を受けて、自分が神の手の中にあることを確認するのです。

自分の命がどこにあると考えているのか、その違いで人の生き方は違ってきます。倉を壊してもっと大きな倉に穀物をため込み、持ち物の満ち溢れの中に命を置くのか、この世の持ち物はこの世にいる仲間と分け合ったり施したり、礼拝のためにおささげしたりして、自分をつねに神の手の中に置くのか、大きく違ってきます。神から「愚かな者よ」と呼ばれることだけは避けたいものです。